

## P-21 一過性に高コリンエステラーゼ血症を示した症例の検討

○石川仁子、谷口照美、前川真人

浜松医科大学医学部・臨床検査医学／検査部

### 【目的】

血清コリンエステラーゼ(ChE)は肝臓での合成能をみる検査として日常診療に広く用いられている。その目的からわかるように、活性低下が肝機能障害などの病態を判定するのに有用で臨床的意義が高い。一方、ときどき基準範囲よりも高値を示す場合があり、ネフローゼ症候群、糖尿病、過栄養性脂肪肝、甲状腺機能亢進症などで見られることが多い。一方、遺伝性的原因もしばしばあり、特にC5バンドが出現するC5変異である頻度が高い。C5変異の頻度は報告例によって異なるが、およそ1～6%くらいであり、高活性集団ではさらに高頻度に認められる。

今回我々は血清ChE活性が本来基準範囲内の活性値を示すと考えられる患者の入院中に、基準範囲上限の1.5倍以上まで一過性に上昇したことに着目した。そして、その原因を判定するために検討を行った。

### 【症例と方法】

71歳の男性。僧帽弁逸脱症および僧帽弁閉鎖不全症と診断され精査加療目的で紹介入院。僧帽弁形成術を

行ったところ、その手術の前後でアルブミンなど他の肝合成能を示す検査値は特に変動がみられなかったが、血清ChE活性が大きく上昇した。上昇は約2週間にわたり、術前の200～300 U/L(基準範囲：200～468 U/L)から最高で700 U/Lを超えた。そこで、血清ChE活性の一過性上昇の原因を調べるために、4/20%ポリアクリルアミドゲル電気泳動を施行し、 $\alpha$ ナフチルアセテートアセトンで活性染色を行った。

### 【結果と考察】

本例のPAGE解析により、経過を通じてC5バンドは認められなかった。主バンドである4量体のC4バンドが最も強く、C1、C2、C3のバンドも認められた。また、ChE高活性時に一致してC4バンドの陽極側に余分に1本のバンドが見られた。これがChEかどうか、抗体との反応性で確認する予定である。この高ChE血症を示した時期が手術の前後であったことから、薬剤や血液製剤との関係を調べたところ、血液製剤との関連性が疑われたため、さらに詳細を検討している。